

蓮如五百年法要を考える

——「如来より賜わりたる信心」への誤解——

山名孝彰

特に蓮如上人に、うらみがある訳ではない。単に蓮如上人を批判するだけでは、充分ではないと思う。かといって、無秩序に讃仰する事も、良識ある教学者の取る立場ではない。今回の蓮如上人五百回遠忌法要を考える事を、新しい時代に飛び出していくエネルギーを身に付ける機縁にしなければならぬと考える一人である。

確かに蓮如上人は、八百年の歴史を持つ我々本願寺教団にとって、功績のあった上人に違いないが、しかし、それは今日まで法灯を受け継いでくれた二十四人の宗主人ひとりと、いやそれに関わった全ての宗門人が、全て均一に尊いのであって、蓮如上人だけが突出して尊いのではない。人間は、その功績や有用性によって尊いのではない。今更説明する必要の無い事である。お金持ちや功績のあった人だけ突出して偉いのではなく、そういう方々のご法事だけ突出して大切にして、そうでない人々のご法事は適当でいい筈がない。

くだいようだが、私論は、蓮如上人個人だけを殊更ターゲットに批判しようとするものではなく、親鸞聖人のご精神である同朋精神を標榜している我が教団が、その親鸞聖人のお心に反する姿をさらけ出して、無秩序に蓮如上人を讃仰する事に強い違和感を感じるといふ事。そして、なぜその事が、親鸞聖人のお心に反していると思うのかを述べてみたい。

蓮如上人五百回遠忌法要を間近にひかえ、各方面で蓮如上人を讃仰する行事が行われ、その功績を讃えるご法話にあわせていただく。それらのご法話の殆どの中で、「親鸞聖人あつての蓮如上人、蓮如上人あつてこそその親鸞聖人。」と躊躇なく讃仰される。確かにその通りである。

今更、私如き者が解説を加える事ではないが、つまり親鸞聖人がお出ましにならなかつたら、蓮如上人はこの世に生まれ出でていない。これは歴史学、生物学云々を

待たず、理屈ぬきでその通りである。(最近は、これさえも否定される論調が、一部の『誤解の誤解』辺にあるようであるが：)

一方、いま現在の本願寺教団の興隆?ぶりを見る時、実は蓮如上人があつてこそこの本願寺であり、蓮如上人あつてこそこの親鸞聖人である。蓮如上人がこの世にお出ましにならなかつたら、我々は一生涯、親鸞聖人という方のお名前も知り得る事がなかつただろうし、お念仏する事もなかつたのである。当時の本願寺は、今のような立派な造りではなく、四間四面程の小さなお御堂で、誰も気付かずに通り過ぎるようなものであつた。今にも消えそうな、まさに息絶えんとしていたお念仏の灯火を、今のような本願寺教団に仕上げたのが蓮如上人、と言われる。そういう理由で、蓮如上人がなかつたら、我々は今ここで、本願念仏の法義に遇う事もなかつた。ゆえに、蓮如上人あつてこそこの親鸞聖人、と言われる。

この論は、一見もつともそうに聞こえるが、あくまで仮説としての誘導的な例話であり、想像の域を越えていない。上記に「蓮如上人あつての親鸞聖人、は確かにその通りである。」「としたのは『仮説とその結果』のひとつとして「その通りである。」と述べたのであつて、仮説として本願寺教団や蓮如上人を語るのなら、私はもつ

ともつと想像たくましくして、今をときめかず五木氏には悪いが小説家まがいの発想を発す事はさほど難しい事ではない。私なら、「蓮如上人がお出ましにならなかつたら、もつとすばらしい本願寺教団になつていたに違いないであろうし、差別を温存したり、助長したりする、おまけに、「それは煩惱の仕業だからどうしようもない事なんだ」と親鸞聖人のお心に反して、堂々と居直るような僧侶を、野放しにするような教団にはなつていなかったかも知れない。あるいは蓮如上人がこの世にお出ましにならなかつたら、別の上人がもつとすばらしい輝かしい功績を築き上げて下さつていたかもしれないし、あるいは、：無意味な仮説と空しい空想はこの辺にしておくが、想像や仮説ならいくらでも出来るという事が述べたかつた訳で、つまり歴史に仮説はあてはまらないのである。

「蓮如上人がこの世にお出ましにならなかつたら、親鸞聖人という方のお名前も本願寺も知り得る事がなかつただろうし、我々はお念仏する事もなかつたのである。」という事は必ずしも正しくないという事になる。

日本仏教の歴史において、かつて一度だけ日本独特の奈良・平安仏教の貴族権威、祈禱呪術の呪縛を完全に打ち破つて、仏教を民衆に引き降ろした時代があつた。鎌

倉仏教の宗祖親鸞聖人である。

そもそも、日本に仏教が伝わって、奈良・平安・鎌倉と伝わるうちに、日本独特の性格を持った仏教（貴族仏教・呪術仏教・律令仏教・神仏一体思想）に仕上がったのをご覧になって、今にも消えそうな仏教の灯火を「これこそが仏教だ。」と示されたのは、宗祖親鸞聖人であった。貴族が、栄華栄耀を誇り、飛ぶ鳥を落とす勢いが、来世にまでも続きますようにと祈願して仏教を信仰した力と金のある者の為だけの仏教。呪文・まじないの類いの仏教。政治にがんじがらめにされた仏教を、親鸞聖人がご覧になって、まさに息絶えんとしていた仏教に、新しい生命の息吹を与えられたのである。

これは、日本に仏教が伝わって、親鸞聖人がお出ましになるまでの六百年間のうちに、曲げられて伝わってきたものを、本来の教えに戻したものであるが、蓮如上人の場合は、元々まっすぐなものを、曲げて通ってきた訳である。そしてその湾曲は、直されることなく現代まで続く。貴族権威、祈禱呪術は形を変えて教団や寺院の奥にある宗教的権威の中に座り込んでしまった。

ご本典の出版の歴史を見ればわかるが、聖教削除は教団史上で、最大級の汚点として有名である。都合の悪い

ご文は否定したり削除したりしてきた事が本願寺教団の歴史であった事は周知の通りである。

主上臣下法に背き義に違し、いかりを成し怨みを結ぶこれを忠実に現代語訳すると、「主上」は当時の天皇、「臣下」はその家臣、という事で、

天皇のやつらめ。私は腹が立って腹が立っておさまらん。おのれ覚えとれよ!!

という程のものであろう。

これが蓮如上人のところでは

守護地頭を軽んじるな、大事にせよ。

と湾曲していくのである。『誤解の誤解』辺りでは、これを「蓮如上人の時代状況」と理解していく。蓮如上人にいたっては、本願寺の境内で、信長・秀吉に血のしたたる生首を前にお茶をもてなした、と伝えられる。これも「蓮如上人の時代状況」なのだろうか？主上臣下法に背き義に違し、はどこへ行ったのか？いかりを成し怨みを結ぶ、はどうなったのか？

時代状況という事は、つまり本願念仏のご法義を曲げなければ広める事が出来なかった時代状況、という程の意味であろう。元々まっすぐなものを、まげて使わなければならなかった時代状況を、とりあえず理解したとして、曲げたものを元に戻す作業はどうするのか。やむを

得ず曲げて通って来たのなら、直しておかなければならぬのではないか。今後曲がったまままでええわい。という訳にはいかない。「あれは曲げた人や、曲げなければ伝える事の出来なかつた時代状況が悪いのであって、自分とは関係無い事だ。」あるいは「もうすんだ事だ。」と、曲げて通って来た人の五百回忌の法事を、手放して平気な顔をしてする事はできない。なぜならば、この私も、曲げて通ってきた人と同じ教団人の一人であり、曲げて通ってきた人が生きていたのと同じ、本願念仏の教えに生きているからである。「自分とは関係無い事だ。もうすんだ事だ。」と無関心でいる訳にはいかないのである。

このたびの蓮如上人五百回忌法要のフィーバーぶりを見る時、蓮如上人の持つ封建的、差別的な習俗・迷信まで「伝統」の名のもとによりがえらされ、封建教学を受け継いで行く事になるのではないかと懸念する。これは、やがて世俗社会は丸ごと肯定され、ついには人道世法に従順な生き方が、念仏者のあるべき姿であるという観念を生み出していくことにしかならないのである。宗祖親鸞聖人から見れば、想像もつかない程の異端であると言わざるをえない。

比叡山のてっぺんでやってきた事に、親鸞聖人はあき

れて山を降りた（これは降りた理由のほんの一部にすぎない）。ところが、比叡山のてっぺんを再現して見せてくれたのが蓮如上人や顕如上人であった。再現された山のてっぺんは今日まで続く。そのいい例が安居や安心論題であろう。蓮如上人や蓮如上人以降の本願寺を、親鸞聖人がご覧になったら「怒りをなし怨みを結ぶ！」であろう。

糾弾会の場で問われた「あなたたちは、我々に『すまない。申し訳ない。』とおっしゃるが、親鸞聖人に対して『申し訳ない事だった。』と思わないのですか？」という言葉に、背中に冷や水を浴びせ掛けられる思いがする。

また、最近よく聞かれる、「蓮如上人も確かにおかしい所もあるが、人間誰しも大なり小なりあることで、完璧な人間はいない。悪い所は目をつむって、いいところだけ、功績だけを讃えたらいいのではないか。」という論調がある。人情・友情としては「ごもつとも」という感もなきにしもあらず、というところだが、あの有名な妙好人、因幡の源左さんにこんな話がある。戦争の時、山陰の海岸に流れ着いた中国の兵隊さんを、槍を持ってお念仏もろとも突きに行ったという。あるいは、本願寺大谷光照前門主にいたっては、第二次世界大戦の際、「の

ちの世は、弥陀にまかせて今は君(天皇)につかえよ。」(つまり、念仏者はお国のためによるこんで死んでこいよ。)と死に行く特攻隊を激励したそうである。浄土真宗が組織ぐるみで体制順応の姿勢をアピールしてみせたのであるが、これも戦争や時代状況が悪いのであって、個人に責任はない、と言い切れるだろうか? 「悪いところも多少はあったが、功績だけをたたえていけばいいではないか。」というが、どこに功績があるのか? また、年配の方からよく聞かされる事だが、「天皇陛下が、あそこで無条件降伏をご決意下さったからこそ、いまの平和な日本になった。あのまま続けば、と思うと：今の平和な日本は、国民の事を思えばこそその天皇陛下のお陰。」と。本当に国民の事を心の底から思う人は、初めから殺し合いの戦争をしない。

かなり話が逸れてしまったが、要は、曲げて通ってきた信心のありかたで、殺人を勧奨したり、黙認する信心があるか否か、という事に収まる。具体的に信心とはどのような状態であるか?

中外日報一九九七年八月五日号の第一面に「デカデカと掲載されたM氏の記事の中に、「信心に関して蓮如と親鸞は寸分たがうところはない。」と『歎異鈔』の信心一異の争論をかけあいにして、「共に如来より賜りたる他

力の信心であるから一味である。」と結論づけられている。挙げ句の果ては、「わたしに向かつて「おまえは異安心だ。」と言うのか。そんなにあなたは偉いのか」と。心中ただならぬお気持ちには、お察し申し上げるけれども、しかし、明らかにM氏の論は、自分に対する川本氏の批判論文に逆上し、それに対する感情(うらみ)が先行して書かれており、かなり無理がある。信心がお浄土行きの片道切符の様な「もの」ではない事は先刻ご承知であろうと思う。それこそ私如き若ぞうが説明するほどの事もないのであるが、「賜りたる」とは「育まれる」というほどのことであろう。信心は「もの」ではなく「状態」である。

親鸞聖人のお言葉は、私の不勉強のせいで、少し言い回しが難しく感じる事がある。例えば「大般涅槃を証する」とか「真実証を得る」などなど：蓮如上人は同じ? 事を「お浄土へ参る」と、わかり易く言い換えた。宗祖親鸞聖人の領解を、蓮如上人は信念の世界に持ち込んだのである。蓮如上人が、親鸞聖人のご法義を何とか継承しようとする苦心された事は、ここからも良く伝わってくる。わかるという事は、少なからず大切な事ではないかと思う。しかし、わかり易いという事と、それが正しい事であるという事とは違う。わかり易いだけでお浄土へ参る

訳にはいかないのではないか。

後生こそ永生の楽果

後生たすけたまへ

罪深き我が身なれど「後生は永生の楽果なり」「後生たすけたまへ」と一心に阿弥陀如来をたのみもうせば、たのむ人は皆悉く極楽へ往生できる。このご恩のありがたさに、寝てもさめても命のある限りは感謝のお念仏を称えよ。「タノムタスケタマへ」の「タノム」は決定要期の義であって待ちもつける姿。「タノム」とは帰依・信順の義であって「タノメタスケル」との如来の勅命：フムフムなる程。一応理解できない事はない。が、では具体的に

「タスケル」とは、どのように「タスケル」のか？「タスケル」とは、どのように「タスケル」のか？「タスケル」とどうなるのか？

という事が、不消化のままに置き去りにされている訳で、わかったようなわからぬような、専門用語を並べ替えたり、言い換えたり、置き換えているだけではないか。

宗祖親鸞聖人のすくい、自らを含む全ての民衆の生活のよりどころを、明らかにすることであった。ところが、念仏の教えが生活と遊離してくると、今度は宗学の内面的な構造関係だけを研究し始めることに陥るのであ

る。まさしく、安居や安心論題に代表されるころの、「言葉の遊び」である。

では、具体的に、ダイナミックに「タスケル」とはどうなることなのか？

よく、阿弥陀様がありがたい。と聞く。どうありがたいのか、が語られる必要がある。なんとなくありがたい。日光の陽明門に毛の生えたような浄土の楽しみだけを夢見せてきたのが「タノムタスケタマへ」に代表されるころの「わかり易い」蓮如教学であった。

罪深き我が身なれど、一心に阿弥陀如来をたのめば、阿弥陀様がスルスルっと降りてきて、大きな風呂敷を広げてくれて、それにドブツとすくわれて、たのむ人は皆悉く極楽に往生できてありがたい。…まあ、それもわかり易くてありがたいのだろうけれども、信心をあらわすにはもう少し大切な事が欠落しているのではないか。

よくご法話で、「亡き人をご縁に、寂しい気持ちをご縁にお念仏を喜びましょう。苦しい時も、悲しい時もお念仏を称えろと心が安まるのです。」とお聞きかせ頂く。お念仏が心を清徹に、きれいにしてくれるという事である。確かに人生の苦患や悲しみが、心をきれいにしてくれる、という事はあると思う。が、しかしお念仏を称えれば、心が安まり、世の中のものもや、いらいらが解決

され、自然に心がきれいになっていくのだろうか。確かに体系的な自然の法、法徳の上からは、その様な事も言えるのかも知れないが、どことなく空々しく、短絡的な気持ちが出てこない。

どうなることが、お念仏を喜んだ信心の姿といえるのだろうか。

宗祖は『ご本典』に、

本願を憶念して、自力の心を離るるを、横超の他力と名づける。

と、お示し下さってある。つまり、他力は信心を恵まれたら（育まれたら）何か特別な力がやって来る、というたぐいのものではなく、自力の心を離れた瞬間を、又そういう状態を、他力と名づけるのだ、という宗祖のお味わいである。

信心を得れば、自然に自己中心的生き方が変わり、突然他力の生活ができ、信心の付録（おまけ）のようにありがたい人生観が備わる、という信心の領解が、本当の本当に正しいといえるであろうか。

今までの自己中心的生き方から、人々の悲しみ、苦しみ立ち上がり、自分とは関係ない事だ、と退けていた部落差別をはじめとするあらゆる理不尽な差別は、全く他人事ではなかった、と驚き目覚め、突き付けられた現

実の苦悩をかかえて立ち上がった状態を、横超の他力と名づけるのだ、と私は領解する。その様な立場に立った生き様が、私のお念仏を喜ぶ具体的な姿である。